## 2　中室・経蔵・鐘楼の歴史と建築

### （1）中室・経蔵・鐘楼の歴史と既往の調査

興福寺は、中金堂と講堂の東・北・西をコの字型に取り囲む三面僧房を有しており、東僧房は「中室」、北僧房は「北室」、西僧房は「西室」と呼ばれていた。中室は、西室と同じく、梁行が大きな大房の外側に梁行の小さな小子房が柱筋を揃えて並立する構造で、北室は南から上階僧房・小子房・下階僧房の３棟が並列していたとされる。経蔵と鐘楼は、中金堂・講堂と三面僧房との間に位置し、経蔵は中金堂の北東に、鐘楼は北西に建てられた。

**創　建**　　中室・経蔵・鐘楼の創建については、『興福寺流記』（以下、『流記』）が基本史料となる。『流記』には各時期の資財帳が引用されており、中室を含む三面僧房については、「三面僧房、〈天平十六年記云、〉」としてその規模を記していることから、天平16年（744）以前に創建されたと考えられる。経蔵については「宝字記同之」、鐘楼については「宝字記亦爾也」との記載から、天平宝字年間（757～765）以前の創建とみることができる。

一方、『流記』の別の部分では、「鐘楼・経蔵・三面僧房・政所・雑舎・倉等、本願之御時所造立也」と記されている。これによれば、創建は本願すなわち藤原不比等が生存中の養老４年（720）８月以前に遡ることとなる。中室（を含む三面僧房）・経蔵・鐘楼は、養老４年８月以前に造営に着手され、中室は遅くとも天平16年以前、経蔵・鐘楼は天平宝字年間までには完成していたとみて差し支えないだろう。

**「中室」の初見**　　三面僧房の東僧房が東室ではなく中室と呼ばれるのは、そのさらに東、現在の興福寺本坊の位置に、別の僧房があったためである。この最も東の僧房が建てられたことにともない、三面僧房の東僧房は、相対的な位置関係から、中室と呼ばれるようになったと考えられている。

中室の呼称の初見は、平城京左京一条三坊十五・十六坪の東に面する東三坊大路の東側溝SD650から出土した木簡である（『平城宮発掘調査報告Ⅵ』奈文研、1965）。釈文は下記のとおり。

告知　往還諸人　走失黒鹿毛牡馬一匹 在験片目白 額少白

件馬以今月六日申時山階寺南花薗池辺而走失也　九月八日

若有見捉者可告来山階寺中室自南端第三房之

長さ993㎜・幅73㎜・厚さ９㎜　051型式

内容は「山階寺南花薗池辺」すなわち今の猿沢池辺りで行方不明になった馬の捜索願で、告知札と呼ばれるタイプの木簡である。木簡の年代は、共伴遺物の年代観から平安時代初期の天長年間（824～834）頃とみられる。馬を捕らえたときの連絡先として「山階寺中室自南端第三房」が見え、南北棟建物とみられる点も矛盾しない。したがって、この頃までには東室も成立していたと考えられる。

**焼失と再建**　　中室・経蔵・鐘楼は、建立以後７度もしくは８度罹災したとみられる（第２表）。文献に見える最初の火災は元慶２年（878）４月で、失火により「堂宇僧房」が焼けた。元慶５年９月に遠江以下10カ国の稲穀が「鐘楼僧坊」を造る財源に充てられていることから、元慶２年に焼けた堂宇に鐘楼が含まれることは間違いない。後世の史料に永承元年（1046）の火災をもって最初の大火災とする認識がみえる点を重視すれば、このとき中室と経蔵は火災を免れ、被害は伽藍の西部でおさまった可能性が高い。その後の火災では、中室・経蔵・鐘楼は揃って焼亡している。平安時代までは、中室・経蔵・鐘楼はほぼ同時に再建されているが、治承４年（1180）のいわゆる南都焼き討ち後は、中

第２表　興福寺中室・経蔵・鐘楼略年表

| 和暦 | 西暦 | 中室 | 経蔵 | 鐘楼 | 備　考 | 典　拠 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 720頃 | 創建 | 創建 | 創建 | | |
| 元慶２ | 878 | ? | ? | 焼失 | | 『日本三代実録』 |
| 元慶５ | 881 | ? | ? | 再建 | 鐘楼を造る料を充てる | 『日本三代実録』 |
| 永承元 | 1046 | 焼失 | 焼失 | 焼失 | | 『造興福寺記』『扶桑略記』ほか |
| 永承３ | 1048 | 再建 | 再建 | 再建 | 中金堂院・南円堂供養 | 『造興福寺記』『扶桑略記』 |
| 康平３ | 1060 | 焼失 | 焼失 | 焼失 | | 『康平記』『扶桑略記』『三会定一記』 |
| 治暦３ | 1067 | 再建 | 再建 | 再建 | 金堂・講堂ほか供養 | 『興福寺流記』 |
| 永長元 | 1096 | 焼失 | 焼失 | 焼失 | | 『中右記』『後二条師通記』ほか |
| 康和５ | 1103 | 再建 | 再建 | 再建 | 金堂・講堂供養 | 『中右記』 |
| 治承４ | 1180 | 焼失 | 焼失 | 焼失 | | 『玉葉』 |
| 養和元 | 1181 | | 再建 | 再建 | | 『養和元年記』ほか |
| | 1200以降 | 再建 | | | | 『春日大社文書』16 |
| 建治３ | 1277 | 焼失 | 焼失 | 焼失 | 中室北端房に落雷 | 『興福寺略年代記』ほか |
| 弘安８ | 1285 | 再建 | （再建年不明） | （再建年不明） | 中室馬道は完成 | 『三会定一記』 |
| 嘉暦２ | 1327 | 焼失 | 焼失 | 焼失 | | 『大乗院日記目録』ほか |
| 応永５ | 1398 | （再建年不明） | 再建 | 再建 | | 『寺門事条々聞書』 |
| 享保２ | 1717 | 焼失 | 焼失 | 焼失 | | 『南都年代記』 |

参考文献
太田博太郎『南都七大寺の歴史と年表』岩波書店、1979。
藪中五百樹「奈良時代に於ける興福寺の造営と瓦」『南都仏教』64、1990。
藪中五百樹「平安時代に於ける興福寺の造営と瓦」『仏教芸術』194、1991。
藪中五百樹「鎌倉時代に於ける興福寺の造営と瓦（上）」『仏教芸術』257、2001。
藪中五百樹「南北朝・室町時代に於ける興福寺の造営と瓦」『立命館大学考古学論集Ⅱ』2001。
藪中五百樹「安土桃山・江戸時代に於ける興福寺の造営と瓦」『帝塚山大学考古学研究所研究報告Ⅶ』、2005。

室と経蔵・鐘楼とで再建のタイミングにズレが生じ、以降も詳細は不明ながら再建に時期差がみられるようである。なお経蔵は、江戸時代以前のある段階から鼓楼と呼ばれるようになっている。

**廃　絶**　中室・経蔵・鐘楼は、享保２年（1717）の焼失以後は、再建されることなく現在に至っている。ただし、中室の小子房は宝永５年（1708）の「興福寺伽藍春日社境内絵図」に見えないことから、それ以前に廃絶していたらしい。

**既往の調査と復元**　中室については、1956年におこなわれた食堂の発掘調査の際に、小子房の東・南面の基壇外装（凝灰岩製の地覆石、羽目石および葛石）とその外周の石敷を検出している（『興福寺食堂発掘調査報告』奈文研、1959）。また1976年の水道管埋設工事にともなう調査では、大房南辺柱列の礎石と地覆石を検出している（『興福寺防災施設工事・発掘調査報告書』興福寺、1978、以下『防災報告』）。1998年の第308次調査では、それと一部重複する位置で大房の西南隅を調査し、新たに西辺柱列の礎石を検出している（『興福寺 第１期境内整備事業にともなう発掘調査概報Ⅱ』興福寺、2000、以下このシリーズは『概報Ⅱ』、2000のように記す）。鐘楼については、1975年におこなわれた水道管埋設工事にともなう調査で、中金堂・講堂と鐘楼との間において、地表下0.4mで人頭大の石を用いた石敷を検出している（『防災報告』）。これらはいずれも建物のごく一部もしくは建物周辺の調査であり、中室・経蔵・鐘楼の本体に関わる本格的な調査は今回が初めてである。

これまでの建物規模の復元は、『流記』と地表に露出している礎石の実測を根拠にしたものであった。中室大房については、大岡實による案（『南都七大寺の研究』中央公論美術出版、1966）と、鈴木嘉吉による案（『奈良時代僧房の研究』奈文研、1957）がある。両案とも梁行方向は４間、総長45尺とするが、大岡案は桁行９間、総長は202.5尺、柱間寸法は22.5尺等間とし、北室との規則性を重視する。これに対し鈴木案は、桁行11間、総長は210尺、柱間寸法は北から５間目のみ20尺で他は19尺とする。鈴木案は食堂の発掘調査成果をふまえ、講堂と食堂とを結ぶ軒廊が中室大房と小子房を馬道として貫き、その部分の柱間が他と異なるとみる。また、経蔵・鐘楼については、大岡實による案（『南都七大寺の研究』〔前掲〕）があり、これまでに大きな異論は出されていない。大岡案は、経蔵・鐘楼いずれも桁行３間で総長34尺、柱間寸法は中央間が12尺で両脇間は11尺。梁行は２間で総長22尺、柱間寸法は11尺等間とする。（桑田）

## （２）中室・経蔵・鐘楼の建築

**『興福寺流記』にみえる中室・経蔵・鐘楼**　『流記』では、僧房について、「三面僧房、〈天平十六年記云、〉」として、東西僧房と北僧房について記し、中室という名称は用いていない。東西僧房については、「東西僧房二間、〈各高一丈六尺六寸、広四丈五尺、宝字記云、二丈、長十一間、々別一丈九尺、宝字記云、廿丈二尺、〉小子房二間、〈各高一丈二尺、広一丈五尺、長同大房、宝字記同之、〉」と記す。すなわち東室と西室は、大房と小子房のセットで、桁行は11間で柱間は19尺、大房の梁行は45尺という。桁行総長は柱間寸法が19尺等間とすれば、計算上209尺となるが、宝字記では202尺という。中室はこの東室に相当するものとみられる。

一方、経蔵と鐘楼については、「経蔵一基、〈長三丈四尺、延暦記、二尺文、広二丈二尺、宝字記同之、延暦記云、柱高一丈九尺、角架并高欄端、用裁金銅餝云々、〉鐘楼一基、〈同経蔵也、弘仁記云、長四丈六尺、広三丈五尺三寸、高二丈云々、宝字記亦爾也、〉」と記す。すなわち、経蔵は桁行34尺、梁行22尺で、延暦記によると柱高は19尺という。鐘楼も経蔵と同じとあるが、弘仁記では桁行46尺、梁行35.3尺、柱高は20尺で、宝字記も同じという。これらから、鐘楼は８世紀中頃～９世紀初頭には経蔵より桁行・梁行とも柱間１間分程度（桁行12尺、梁行13.3尺）大きかったことになる。規模の拡大や縮小には建替に近い工事をともなうが、鐘楼を建て替えた記事は見えない。その他の後世の史料でも、基本的には両楼はほぼ同大で記載されている。後述するように、両楼は後世の絵画資料では下層をスカート状とする袴腰に描いており、この出は６尺ほどであるから、全体では12尺ほど平面が大きくなる。この袴腰下端の規模を記したとすれば、およそ基壇に近い規模となり、軒の出との関係からみても齟齬はない。したがって宝字記と弘仁記は袴腰を付加した規模を記している可能性がある。

**『興福寺建築諸図』にみえる鼓楼と鐘楼**　東京国立博物館が所蔵する『興福寺建築諸図』は、享保２年（1717）に伽藍中心部が火災に遭う前後に描かれた指図類で、享保火災後の復興計画の一端を知ることができるとともに、焼失した室町時代初めの堂塔の概略をも知りうる重要な資料と評されている（濵島正士「「興福寺建築諸図」（東京国立博物館蔵）について」『MUSEUM』No.461、1989）。鐘楼と鼓楼については、建地割図（断面図）が計３葉描かれている。『奈良文化財研究所紀要2016』（以下、『奈文研紀要2016』のように記す）では、大橋正浩が主としてその平面について考察しているが、ここではそれらを再度検討し、図の特徴などについて述べておきたい。まず３葉の指図を紹介する。

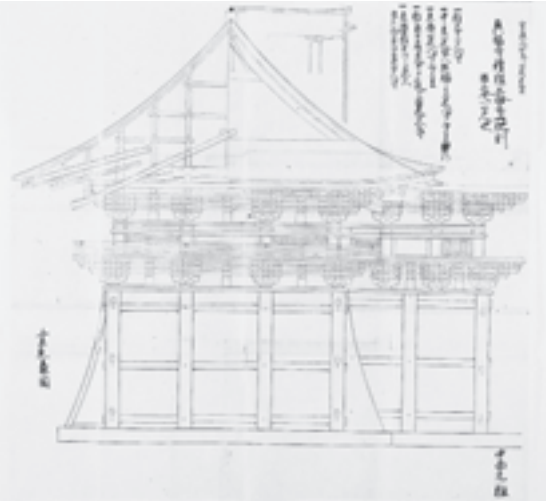
２葉は鐘楼、１葉が鼓楼の指図である。鐘楼の２葉は、一つめが①中西元雅による享保２年２月29日の銘をもつ１／30縮尺の指図で、もう一つは、年紀がないが②中西広保による１／20縮尺の指図である。②も①と同時期の製作と見てよいだろう。鼓楼の一葉は、③中西広保による享保２年３月23日の銘をもつ１／20縮尺の指図である。火災があったのは同年１月４日であるから、いずれも火災後に描かれた図であり復興計画案と考えられる。

これらは、いずれも梁行３間で袴腰付き楼造の建物を描く。柱間寸法が判明するのは①で、「一　中ノま一丈弐尺但脇ノま一丈八寸ふたま梁行」、「一　東西一丈八寸ふたま」と書き込みがある。すなわち、梁行中央間が12尺、両脇間が10.8尺、東西方向が２間で各10.8尺という。②・③には寸法の書き込みがないが、大橋の検討によれば、②は中央間が11尺程度、両脇間が10.5尺程度、③は中央間が12尺、両脇間が10.8尺とみて問題ないという。これらは柱間寸法に若干の出入りがあるものの、発掘調査成果の南北３間（中央間12尺、両脇間11尺）、東西２間（11尺等間）におよそ合致し、大橋も指摘するように、当時の礎石上に再建しようとした計画図とみられる。

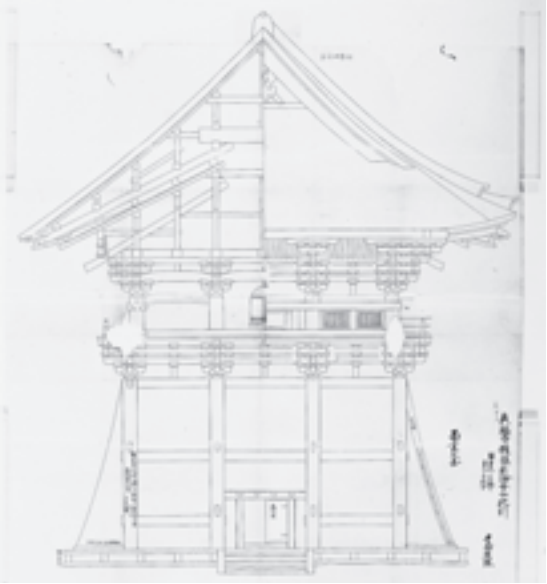
基壇は②・③では壇正積基壇を描き、②では高さが２尺という。中央間には３級の階段を描く。下層袴腰の出は②・③に６尺とあり、柱高は②で21.3尺、③で21尺という。基壇の大きさは、図の計測により50尺前後を測り、これが東西面の基壇規模となる。上層の組物は尾垂木を備えた三手先で、軒は二軒とし、下層柱心からの軒の出は、①では14.7尺、②・③では12.5尺前後と計測できる。

ところで、これらの図を信用すると、鐘楼と鼓楼は東西棟と考えなければならない。享保焼失前の建物の様相を示すと考えられる『春日社寺曼荼羅』では、両楼は南北３間、東西２間で入母屋造の南北棟に描かれている。これらの指図のうち、①は下層に台輪を入れて東西面の腰組を３間に割り、東西面の上層も柱間３間とするが、入母屋造の屋根は、大棟が梁行３間分に及んでおり、桁行を２間に納めることは不可能である。このほか、①は下層に頭貫を入れない、平と妻の尾垂木が交差してしまうなど、建築的にやや問題がある図となっている。②は入母屋破風の蟇羽の出が大きい、もしくは妻側の屋根の勾配がきついとみられ、野垂木を大きく振れ隅とすれば、納まらなくもないが、大棟の短さは否めず、上層の尾垂木が正背面と両妻でやはり交差してしまう問題点がある。③は少なくとも尾垂木の交差は避けているので、３葉の図の中ではもっとも納まりがよい、現実的な図になっている。ただし、やはり桁行２間の入母屋造とすれば、大棟の長さの問題は解消されず、野隅木を大きく振れ隅に納めることが必要となる。建築的な納まりを熟知しているはずの大工が、自ら建築的に無理がある計画図を描くとは思えず、火災後の復興に当たって、もとの礎石を用いながら、両楼を東西棟にするような、施主の強い希望があったことをうかがわせる。

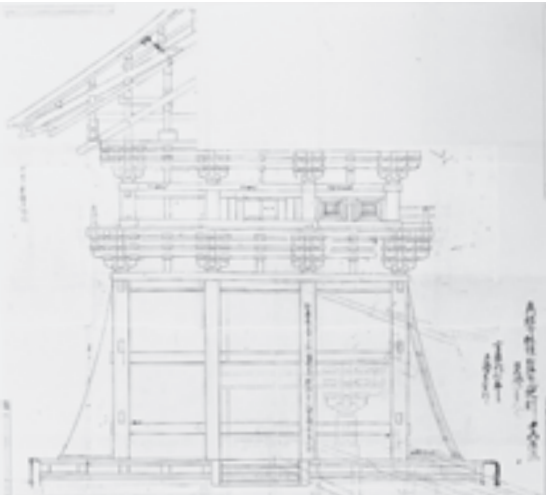
（箱崎和久）



①『鐘楼三拾歩一地割』



②『鐘楼弐拾歩一地割』



③『鼓楼弐拾歩一地割』

第２図　『興福寺建築諸図』（東京国立博物館蔵）